白山手取川ジオパーク（子どもジオパーク博士）

団体名　池上フィールド

代表者名　池上奨

はじめに

ジオパークとは、「大地の物語(ジオ)」と「自然(エコ)」、そしてそれらと私たちの「生活、歴史、文化、産業(ヒト)」との関わりを学び、楽しむ場所である。白山手取川ジオパークは、石川県白山市全域をエリアとして、2011 年に日本ジオパークに認定された。同ジオパークの運営団体である白山手取川ジオパーク推進協議会では、2012 年から、主に市内在住の小学校中・高学年の児童を対象に、野外教育プログラムとして、子どもジオパーク博士の養成に取り組んでいる。2015 年からは、金沢星稜大学人間科学部こども学科の学生が企画段階から参加し、同協議会と協同で開催しており、教育学を学んでいる現役大学生が小学生向けに教育実践を行うことで、「互いに学び合う」教育プログラムとなっている。

活動内容

プログラムの企画・立案の過程

プログラムの企画立案に於いては、2018 年 4 月～6 月にかけて、同協議会職員と同学科学生と協同で、計 6 回の打ち合わせと計 4 回の現地下見を重ね、準備を進めた。打ち合わせで話し合った通りに現地で運営出来るのか不安を抱えながらも、現地下見を重ねて各所の滞在時間を調整し、起こりうる事態を予測してプログラム運営の改善を図り、また白山市の大地の成り立ちを児童に根拠を持って説明出来る様、準備を進めた。今回のプログラムでは、児童に、自分達の住む白山市、いわば「ふるさと」の姿を如何に知ってもらうかに焦点を当てた。企画立案にあたって児童に対し「何を」「どのように」伝えるか。当日の運営に当たっては児童と、どの様にコミュニケーションを図るかという点に重点を置いた。特に企画・立案過程に於いては、学生の発想を活かし、児童が身近に感じる事の出来る体験を行う事で、自分達の住む地域を再発見し、自然の関わりについて知ってもらう事が需要であると考えた。

このプログラムに於いて普段の日常生活で体験する事があまりない内容を組み、白山市の大地が自分達の暮らしにどの様な影響や恩恵をもたらしているのかを体験出来るよう考えられた。

白山手取川ジオパークでは、エリア内最高峰である、標高 2.702 メートルの白山から、エリア内を縦断する手取川を得て、日本海に到達する水の流れ（「水の旅」）と、その「水の旅」に付随した土砂の流れ（「石の旅」）をメインテーマとしている。2 日間のプログラムは、1 日目の「石の旅」から始まり、2 日目の「水の旅」に繋がる様に構成し、この 2 つが児童の白山市で生活する上で欠かせない基盤となっている事を、体験を通じて学ぶことを基図している。

プログラム、

2018 年 7 月 21 日（土）～22 日（日）の 2 日間にかけて実施した。

子どもジオパーク博士 2 日間の主な日程と活動概要
活動場所・活動内容
7 月 21 日（土）
道の駅しらやまさん・ジオパークの説明を聞く
百万貫の岩・岩の説明/見学
白山ろく民族資料館・オバル染め/栃餅つき
白山恐竜パーク・化石発掘体験
道の駅しらやまさん・一日目を振り返る
7 月 22 日（日）
道の駅しらやまさん・2 日目の説明を聞く
中宮展示館・館内説明
蛇谷園地・川遊び
小舞子海岸・石探し
石川ルーツ会館・石のペイント/展示見学・水の旅まとめ/総まとめ/子どもジオ博士認定式

成果、結果の考察

学生が児童達から得た学び

今回の事業では、児童が学生から学んだだけでなく、学生自身も児童から学びを得ている。
以下の５つに整理し挙げたい。

１点目は、児童の興味を惹く工夫である。例えば、退屈そうにしている児童には、ちょっとしたジオパークの豆知識を学生が伝えたり、また、クイズや紙芝居を用いて児童が集中して話を聞けるように説明したりといった工夫を重ねた。これらの工夫により、児童は学生の説明に興味を持って聞いていた。しかし、児童が説明をしっかり聞いていなかった場面もあった。改善策としては、作業や体験を行いながら説明するではなく、説明を聞く態勢を整えてから話す事が考えられる。このように、興味が持てるような工夫をする事、説明をきちんと聞く態勢を整える事が大切であると、学生は学ぶ事が出来た。

２点目は、児童との接し方に於ける学びである。児童の中には、すぐに周囲と打ち解けて友達をつくっている児童がいる一方で、中々周りの児童達と話す事が出来ず孤立してしまっている児童もいた。孤立している児童に対しては、学生が積極的に傍で活動し、他の児童と交流する機会を設けるなど工夫を行った。例えば、化石発掘体験の際は、中々、化石が見つからず、化石かどうか見極めがつかず、担当職員にも恥ずかしくて聞くことが出来ずに困っている児童がいた。そのような児童に対し、学生が声をかけ、“もしかしたら化石かもしれないから一度聞いてみたらどうか”と後押しする事で、児童が自分で聞きに行くことが出来るようになった。この様に、一言でも声を掛ける事で児童は自信がつくのだと、学生は学ぶ事が出来た。

３点目は、１つのことを教える為に、分からないことは十分に調べて理解する事の大切さである。児童は思いもよらぬ視点から学生に質問する事もあり、また下見の際はどう説明するかイメージ出来ていたつもりでも、実際の場面では学生が緊張して上手く話せない場面も見られた。こうした事から、学生は、教える際には事前に自分達が内容をしっかり理解し、本番をイメージした練習を重ね、相手に伝わるように話す事が大切である事を学ぶ事が出来た。

４点目は、野外での活動に於ける注意点である。例えば川遊びをする際には、川底の深く危険な処がある為、児童が遊んでも良い場所を指定し、学生がその境界に立つ事で子児童達が遊べる範囲を可視化した。その為、当日は怪我なく川遊びを行う事が出来、学生は野外活動に於いて安全面に配慮する方法を学ぶことが出来た。

５点目は、筋道や根拠に基づいて目標を立てる事である。例えば企画立案過程に於いて、協議会職員との対話の中で学生は様々な事に気づく事が出来、普段関わる事のない立場の人物からアドバイスを受ける事で、根拠をもって、目標を立てて、活動する事の重要性を学ぶ事が出来た。

今後の課題、展望

今回の企画は、児童にとって普段体験出来ない事を新しく出来た友達と楽しめる活動になった。
またプログラムに於いて、体験活動を取り入れた事で児童の印象に残ったが、聞くだけの学習活動はあまり印象に残らなかった。だから、児童の印象に残るような説明をし、児童が楽しめて満足出来るような活動を企画、運営する事が今後の課題である。
そして、子どもジオパーク博士の活動が楽しかっただけでなく、知識が身につく学習になる事が重要である。